

## 小学校体育科表現運動における「教育の質」の向上に向けた実践報告

：附属学校と教職大学院の連携に着目して

横浜国立大学大学院教育学研究科

坂田 怜奈

横浜国立大学教育学部

山崎 朱音

横浜国立大学教育学部

梅澤 秋久

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校

石黒 功

### 1. はじめに

#### 1.1 問題の所在

中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」(2015年7月11日)によると、教職大学院には、①学部段階で教員としての基礎的・基本的な資質能力を修得した者の中から、さらにより実践的な指導力・展開力を備え、新しい学校づくりの有力な一員となり得る新人教員の養成と、②一定の教職経験を有する現職教員を対象に、地域や学校における指導的役割を果たし得る教員として、不可欠な確かな指導理論と優れた実践力・応用力を備えたスクールリーダー(中核的中堅教員)養成の2つの目的・機能が示されている。すなわち、教員養成の高度化が求められており、教職大学院においては、より専門性を高めた実践的指導力の高い教員の養成が求められている。そのために、教職大学院と県教育委員会、県総合教育センターとの連携をはじめ、研修プログラムの開発など、各大学において様々な取り組みがされている(山崎, 2018)。

これまでに、大学の教員養成課程の学生の実践的指導力を高めることを目的とした模擬授業と省察による授業プログラムの開発(木山, 2016)や、授業を省察する力を核としたカリキュラムの開発(清水ほか, 2018)が行われている。さらに、附属学校・附属学校教員と連携し、大学院生が附属学校にて授業観察及び授業実践を行うことによる大学院生の省察内容の深まりが認められている(山崎ほか, 2018)。つまり、教員養成段階における実

践的指導力の向上には、模擬授業などをもとにした実践的な学びと、実践を省察する力の向上が重要な視点であるといえる。

教員養成課程・教職大学院のカリキュラムの作成において、実践を学ぶ場としての附属学校、そして実践的指導力を有する附属学校教員との連携は欠くことができない。このことについて、例えば、教育実習期間及び実習前後における附属学校と大学の双方の連携に関する研究が取り組まれている(米村, 2007; 宮崎, 2010; 藤田・岩田, 2019)。理論の専門家である大学の教師教育者と実践の専門家である実習校の教師教育者<sup>注1)</sup>が互いの視点を出し合って指導することは、教員志望学生が理論と実践の双方の観点を考慮しながら教育実習を行うことを支援する試みであるといえ、大学と実習校をつなごうという側面で一定の成果を出している(粟谷ほか, 2022)。また、教職大学院と附属学校との演習・実習を連携させたプログラムの開発も行われている(中井ほか, 2020, 2021)。このように、教員養成課程ならびに教職大学院において、附属学校との連携は学生・大学院生の実践的指導力の育成に大きな貢献があることは明白である。

吉崎(1987)が示す「授業についての教師の知識領域」は、「教材内容についての知識」「教授方法についての知識」「生徒についての知識」とその複合領域によって成り立つ。中井ほか(2020)は、教職大学院生の省察力の向上に向けて演習・実習科目を連携させた教職大学院プログラムの開発・実践を通し、学部卒院生の

「授業についての教師の知識構造」が、「教授方法に関連する知識」に基づいていることを指摘している。つまり、附属学校との演習・実習等を通じた連携により、大学院生の「教授方法に関する知識」の広がりや深まりが確認されている。

以上のように、大学・教職大学院と附属学校が連携することで、大学生・大学院生の学びはより実践的なものとなり、実践的指導力を持つ教員養成が可能となる。一方で、附属学校・附属学校教員にとっては業務の負担増が懸念される。しかし、大学・教職大学院との連携が互恵関係を生み、附属学校における「教育の質」の向上に繋がるならば、より一層双方が連携した取り組みが期待できるのではないだろうか。

小学校教員は、全ての教科を担当する。教員養成課程や教科研究会等において、体育科を専門とする教員においても、その教員がクラブチーム等で競技を継続してきた運動種目もあれば、小・中・高校もしくは大学の授業で経験した程度の運動種目も存在する。このように体育科を教科専門とする教員が全ての運動種目の専門性が高いとは言い難い。つまり、体育科の授業を担当する教員は、運動種目によっては「教材内容に関する知識」が少ないことが考えられる。そのため、専門種目をもつ教職大学院生が授業づくりへ関わることにより「教材内容についての知識」の提供が可能となり、児童・教師にとっての「教育の質」が高まるのではないかと考えられる。

### 1.2 研究目的

横浜国立大学教職大学院では、附属学校と連携しながら、教職大学院生の教職専門実習<sup>注2)</sup>を実施している。その際、小学校体育科運動領域における特定の領域について専門性の高い教職大学院生が附属学校教員の授業づくりへ積極的に介入することで、附属学校教員の領域内容と教材に関する専門的知識が深まるか、児童にとっての「教育の質」を確保できるかが本研究のリサーチクエスチョンである。

そこで本研究では、小学校体育科表現運動領域に着目し、表現運動についての専門性が高い（以下、専門種目をもつ、と表記する）教職大学院生が授業づくりに介入することが、附属学校教員の「教育の質」の向上に繋がるのかを明らかにすることとする。

## 2. 研究方法

### 2.1 対象

#### (1) 対象者・対象授業

対象教諭A（以下、A教諭）は、横浜国立大学附属B小学校に所属する教職歴15年の男性教諭であった（B小学校では4年目）。A教諭は、B小学校において体育部会に所属し、体育科の授業づくりに精通しているものの、A教諭の専門種目は球技である。そのために表現運動については必ずしも専門家とは言えない。教職大学院生C（以下、大学院生C）は、横浜国立大学大学院1年次の大学院生であった。幼少期よりモダンダンスをはじめ、現在も活動を継続している。また、小学生から大学生の間に全国コンクールでの受賞歴をもつ。

なお、対象授業は、横浜国立大学教育学部附属B小学校第3学年2組34名の児童に実施した授業とした。

#### (2) 対象授業の実施時期・場所

本研究で対象とした授業は、大学院生Cが実施した表現運動「表現」（全1時間）と、A教諭が実施した表現運動「表現」（全8時間）であった。なお、A教諭が実施した授業について、大学院生Cはティーチングアシスタントの立場として参加した。

授業実施時期については、大学院生Cの授業実践は2021年7月9日、A教諭の授業実践は2021年10月から12月（全8時間）であった。授業場所は、横浜国立大学教育学部附属B中学校武道場であった。

#### (3) 授業概要

##### ① 大学院生Cの授業実践

本時のねらい：みんなで心も体もほぐほぐになろう  
授業（1時間）の主な流れ：

- |  |
|--|
| ① 全力体じゃんけん<br>勝った時の嬉しい感情、負けた時の悲しい感情を全力で表現する活動。               |
| ② 新聞紙になりきろう<br>操る側と表現する側に分かち、操る側が持っている新聞紙のように表現する側が身体表現する活動。 |
| ③ 波になりきろう<br>教師が放つ波の様子を表すフレーズからイメージをして身体表現する活動。              |
| ④ 木になりきろう<br>児童の発言により急遽追加された活動。                              |
| ⑤ 本時の振り返り  |

##### ② A教諭の授業実践（全8時間の単元）

概要：A教諭は「みんなとちがう動き」が合わさってできる「一体感」を感じる授業を本単元のコンセプトとしており、表現運動ならではの特徴である「いかに人と違った動きができるか」を大切にしている。単元を

通して、その子にしか表現できない動きを認め、称賛し、新たな動きをつくるという活動を行う中で、「人と違う動き」を考えながらも、全てが合わさった時に感じる一体感や体で表現することの楽しさを子ども達を感じる授業をデザインしている。

単元名：「『心』にひびく開会式をプロデュース！東京オリパラ 2020」

単元のねらい：題材の特徴を捉え、表したい感じを表現するとともに、自己やグループの課題の解決に向けて、表したい内容や発表の仕方を工夫し、考えたことを友達に伝える。また、場の安全に気を付けながら、表現運動に進んで取り組む態度を養う。

単元（8時間）の主な流れ：

① 友達とちがうオリジナルの動きで楽しもう おへその高さや位置を変えることを意識することで動きの幅を広げる活動。
② 「より速くより高くより強く」を表現して楽しもう テーマに則り子ども達から大きな動きを引き出す活動。
③ 『『より』より速くより高くより強く』を表現して楽しもう 表現したいものにさらに近づくため、グループ同士で見合いアドバイスをする活動。
④ 「ともに」を表現して楽しもう みんなで一緒になることの良さを感じ、一体感を出すためにはどのようにしたらよいかを考える活動。
⑤ オリジナルの東京オリパラ開会式を考えて楽しもう 日本独特の春夏秋冬、聖火、スポーツを組み合わせるクラスでオリジナルの開会式をつくる活動。
⑥ 日本独自の四季の表現を「はじめ なか おわり」を意識して楽しもう 四季の表現をもっと深めるためにはどのようにしたらよいかを考える活動。ひと流れを意識して踊る活動。
⑦ ひねりも生かした大きな動きで表現を楽しもう 体をひねることを意識させることでもう一つ大きな表現を子ども達から引き出す活動。
⑧ 指先までそのものになりきって表現を楽しもう 体の細部まで意識して身体表現する活動。

## 2.2 調査内容

### (1) エピソード記述

本授業実践を iPad で撮影・記録し、大学院生 C が実践した 1 時間の授業実践と A 教諭の 8 時間の単元の中で、大学院生 C が指導・示範等を行った部分について、児童の動きの変容を中心にエピソード記述分析を行った。

### (2) 対象者への半構造化インタビュー

単元終了後に、研究者 2 名（体育科教育専門、舞踊教育専門）が A 教諭と大学院生 C に対して半構造化インタビューを行った。インタビューは 2022 年 8 月 16 日・25 日・27 日であった。

インタビュー内容は以下の通りである（表 1）。

表 1 インタビュー質問項目

質問項目
・大学院生 C の授業実践、また大学院生 C の授業実践から A 教諭の単元終了まで、児童の動き（技能）にどのような変化が生じたか ・大学院生 C が授業づくりに関わったことにより、どのような変化が生じたか ・専門種目をもつ教職大学院生が授業づくりに関わることの成果と課題

### (3) 研究の信頼性

エピソード記述の記述内容、インタビューを考察した分析結果においては、体育科教育学を専門とする大学教授 1 名、舞踊教育学を専門とする大学准教授 1 名、大学院生 1 名の計 3 名によって分析し、3 名の意見が異なるところは意見が一致するまで検討を繰り返し、信頼性を確保した。

## 2.3 倫理的配慮

事前に授業者と相談し、実践の目的・内容を伝えた上で授業実践を行った。横浜国立大学 B 小学校校長には、研究以外の用途で取得したデータ、知り得た児童の個人情報を使用しないことを条件に、授業実践、撮影の許可を得た。

## 3. 結果と考察

### 3.1 大学院生 C の実践による児童の動きの変化

質問内容「大学院生 C の授業実践で児童の動きにどのような変化が生じたか」の回答は、表 2 の通りである。

表 2 児童の動きの変化①

A 教諭
1 時間大学院生 C が「表現」の授業を実践してもらったときに、大学院生 C の授業のもっていき方、子どものもっていき方がすごいと上手であった。そこで子ども達を見ている中で、特に照れなく出来た気がした。テーマを決めて何かを踊るのではなく（即興表現であった）新聞紙を使ってひらひらさせたり（して子どもがその動きをまねする）したが、結構解放しているなという感じがした。そのため、私も「表現」で授業ができるという自信がかった。
解放していたのは、心理的な面と身体的な面でもあった。大学院生 C はもっていき方が上手だったなという。一緒になってこうやって動くよみたいなのを大学院生 C がやってくれるので、それで子どもたちもあーやってみよっかなと踊っていた。あとは今までずっと一週間ずつ（クラスに）入ってくれたので、その安心感が子ども達にかなりあった。
大学院生 C
新聞紙の実践は、私の誘い方（新聞紙の動かし方）を見て、児童と一緒に動いているという印象であった。
例えば、私が手を挙げているのを見て、同じような動きをしていた。動きがダイナミックになるように、新聞紙を動かすときに意識的に自分も体を動かすようにした。

（ ）内は研究者が追記

## 小学校体育科表現運動における「教育の質」の向上に向けた実践報告

A 教諭の回答より、大学院生 C の 1 時間の授業実践により、児童の心身が解放されていた様子が見えてくる。そこには、大学院生 C の授業の展開の仕方が作用していたことが推察される。大学院生 C の回答からは、大学院

### 【エピソード記述 1：大学院生 C の示範】（下線部は考察に特に関係する箇所）

新聞紙になりきろうという活動を行っている場面である。

大学院生 C は子ども達に「皆さんの体はこれから新聞になります」と伝えた。これは、操る側と表現する側に分かれ、操る側が持っている新聞紙のように表現する側が身体表現する活動である。まずは大学院生 C が子ども達に向けて見本を実演する。「例えば（新聞紙を）くしゃくしゃとやったら…」と言いながら大学院生 C は代表で操る側の担当をしてくれた男子児童に新聞紙をたたむよう指示を出す。すると、その男子児童は新聞紙を半分に折りたたみ、柔らかくくしゃくしゃと丸める動作をした。大学院生 C は新聞紙がたたまれた瞬間、自分の体を同じように柔らかく内側に丸めて、操る側の男子児童が新聞紙を広げたらその動きに合わせて自分の体も外に向けて広げる動きをした。「例えばフワツとか（新聞紙が上に）上がったら…」と大学院生 C が言うと、すかさず操る側の男子児童は新聞紙を上に向けて動作を行い、大学院生 C も投げられた新聞紙と同じようにフワツとした質感で両腕を真上に放り投げながらその場でジャンプをした。見本を見ている子ども達からは大きな笑い声があがり楽しんでいる様子が伝わってくる。

次に、大学院生 C は操る側の男子児童に対して「あとは何ができるかな？」と問いかけた。その男子児童は「ビリッって破いていいの？」と大学院生 C に聞き返す。大学院生 C は「そうそう！（いいね）やってみて！」と言うと、操る側の男子児童は新聞紙の角を小さくちぎった。大学院生 C はまた新聞紙の動きに合わせて自分の頭を右側に倒し、同時に右肩だけをすくめる動きをして角がちぎられた様子を身体表現した。さらに、大学院生 C は代表の男子児童に「思いっきりやってみて」と伝えて勢いよく新聞紙を破くように指示を出した。男子児童は先程よりも力強く新聞紙を破く。すると、大学院生 C はムチのようにしなせながら頭と両腕を勢いよく真上に放り投げるように強く破かれた新聞紙の様子を表現した。男子児童は大学院生 C が動き終わるのを確認すると、もう一度新聞紙を強めに破いたり、くしゃくしゃ丸めたりして新聞紙を自由自在に操った。そして、大学院生 C も次々に形を変えていく新聞紙に合わせてキレイ良く足を上げたり、体がバラバラになったような動き方をしたりして見本を演じた。新聞紙になりきり動き続けた大学院生 C の身体からは子ども達に向けて、「恥ずかしくないよ。こんなに動きは自由でいいんだよ。」というメッセージが込められているように見えた。見本を見ている子ども達からは常に笑顔が溢れており、とても楽しそうな雰囲気がつくられていた。

### 【エピソード記述 2：児童が新聞紙になる場面】（下線部は考察に特に関係する箇所）

大学院生 C から説明内容を聞いた後、実際に子ども達が新聞紙になりきって動いている場面である。

操る側の大学院生 C を中心に子ども達は半円状に広がっている。大学院生 C が新聞紙を下から上にフワツと持ち上げると子ども達は一斉にその場で跳び上がり、そのまま大学院生 C が新聞紙をゆっくり下ろして床につけると子ども達は新聞紙の動きに合わせてしゃがみ込み床に手をついた。そして再度、大学院生 C が新聞紙を上を持ち上げて前の動きよりもさらにゆっくりと床まで新聞紙を下ろすと、子ども達も合わせて真上にジャンプをして先程よりも丁寧に下までしゃがみ込んだ。大学院生 C は子ども達の動きを確認しながら床の上で新聞紙を綺麗に折りたたむ。そして、子ども達も身体を小さくできなさそうになったタイミングでくしゃくしゃに丸める動きに変更して床にあった新聞紙を胸くらいの高さまで持ち上げた。新聞紙に合わせてダンゴムシのように床の上で丸まっていた子ども達も大学院生 C と一緒に徐々になら立ち上がってくる。子ども達からは大学院生 C が動きを変える度にキャーっという声や笑い声があがり、開始早々全員が夢中になって活動に取り組んでいる姿が見られた。

次に、先程丸めた新聞紙の塊を大学院生 C が丁寧に広げていく。そして、子ども達に見せつけるようにしながらぐるぐる回して新聞紙を浮遊させた。なめらかに空中を泳ぐ新聞紙と同じように子ども達も両腕を広げながらぐるぐる回っている。「あ〜あ〜」と言いながら回転の動きを楽しんでいた。大学院生 C は良い頃合いを見計らってゆったりとしたスピードで動かしていた新聞紙を今度は勢いよくくしゃくしゃと縮めた。子ども達からしたら思いがけない早い動きで「うわー！」と大声で驚き、慌てて丸くなりしゃがみ込む。そのような様子を見た大学院生 C は次に思いっきり新聞紙を上に向けて高く飛ばした。再び予想していなかった動きと出会った子ども達は「キャー」と叫びながらその場でジャンプをした。何回か跳んだ後、大学院生 C はまた子ども達に次の動きを悟られないように突然ビリッと新聞紙を力強く破いた。新聞紙の気持ちになりきって痛さを感じたのか、または破るといふ動きをどのように身体表現したらよいか困惑し慌てたのか、子ども達は「キャー」と絶叫すると跳び上がりながら両手両足を大の字に広げた。新聞紙になりきる活動に子ども達は没頭し続けていた。また、楽しそうな笑い声が絶えないその空間には身体表現に対する恥ずかしさを忘れてしまうほどのワクワクが詰まっていた。

【エピソード記述 1】より、大学院生 C の示範は、児童と 2 人組になり、最初は自身が新聞紙を操る側、次に表現する側（操られる側）で行った。操る際は「指導者は新聞紙がたたまれた瞬間、自分の体を同じように柔らかく内側に丸めて、操る側の男子児童が新聞紙を広げたらその動きに合わせて自分の体も外に向けて広げる動きをした」ように、新聞紙を操りながら自らも新聞紙の様子を身体で表現していた。また、新聞紙を表現する側になった際は、児童の操る新聞紙の様子を、「ムチのように（体を）しなせながら頭と両腕を勢いよく真上に放り投げる」動きや、「次々に形を変えていく新聞紙に合わせて切れ良く足を挙げる」など、新聞紙のもつ多様な

質感を、変化とメリハリのあるひと流れの動きにして示範していた<sup>注2)</sup>。このことにより、児童は実際にはなれない新聞紙をどのように身体で表現すればいいのかを理解することができたと推察される。

【エピソード記述 2】より、新聞紙の予想できない動きが次々と展開される中、児童が夢中になって新聞紙の動きを表現していた。力強く破かれた新聞紙を表現するため、跳び上がりながら全身を大きく表現したりする姿、新聞紙の感情まで表現する姿からは、児童が活動に没頭し、新聞紙になりきっている様子が見えてくる。表現において「なりきる」ことは運動の面白さに触れる第一歩であり、児童の心身が解放されている様子が見えてくる。

ここでは、教材の持つおもしろさも含まれるが、大学院生Cの指導の展開の仕方に着目できる。まず、大学院生C自身が表現する側になった際に全身を使って新聞紙を表現したことである。これにより、児童は身体で新聞紙をどのように表現するのか、その具体を理解することができたといえる。また、大学院生Cが踊りながら新聞紙を操ったことによって、児童は様々に変わる新聞紙の動きだけではなく、大学院生Cの動きからもヒントを得て踊ることができたと推察される。また、大学院生Cの新聞紙の操り方も、児童をハッとさせるようなメリハリのある流れで新聞紙を操っていた。そのため、児童も気持ちを途切れさせずに緩急強弱のある動きができたと言及される。

このように、大学院生Cによる1時間の授業実践により、児童が新聞紙のイメージの世界に没入してなりきって全身の動きで表現する(文科学省, 2018)ことができたことは、児童に表現運動「表現」の特性に触れさせることができた授業であったといえる。

### 3.2 単元を通じた児童の動きの変化

質問内容「大学院生Cの授業実践を経て12月の授業実践まで、児童の動きにどのような変化が生じたか」の回答は、表3及び表4の通りである。

表3のA教諭の回答からは、動きが固定化されてきた児童に対し大学院生Cが示範したことで、児童に「ダイナミックに踊ること」への気づきが生まれ、手を伸ばす“動き”が、身体の使い方や緩急をつけて“表現すること”に変化した様子が見られる。大学院生Cが指導時にかけた言葉にも、極限まで体を使うことを促す「手が長くなった感じ」や、空間の変化を促す「移動距離を長くしたら」、メリハリを促す「すごくゆっくり/速くやってみたら」のように、表現の技能である「変化とメリハリのつけ方」を意識した言葉かけがみられる。このことから、大学院生Cが実施した授業実践とA教諭が実施した全8時間の授業実践により、児童の心身が解放され、児童の動きが「先生のまね」から自分たちのイメージを変化とメリハリのある動きにして踊ることができるようになったと考えられる。

表3 児童の動きの変化②

A教諭
授業の最初の導入で、スポーツ、格闘、擬音…など様々な動きを子どもたちは疲れ果てるまで表現していった。そこからは子どもたちの恥ずかしさのハードルはかなり下がったように感じた。しかし、動きが単調だったり、表現の引き出しが少なかったりする部分があり、動きが固定化されている子どもも多かった。 単元を進めていく中で、授業の途中でC先生が、「こんな動きもあるよ」というような形で、見本を見せてくれたことで、子どもたちの動きがダイナミックになっていった。これは、「表現」をやってきた人でないといけない誘い方だなと感じた。手を伸ばすと言っても、私が手を伸ばすのと、C先生が手を伸ばすのでは、雲泥の差がある。画像や映像で見せるのとは違い、ひねりがあったり、指先が伸びていたり、勢いを感じたりというのを子どもたちが直に見ることができたというのは、素晴らしい学びだったと思う。 最終的に子どもたちは「C先生のような動きをしてみたい」という思いが生まれ、人とは違うオリジナルの動きができるようになったり、大きく見せるために跳びはねたり、指先まで意識することができるようになっていった。
大学院生C
12月にかけてアドバイスをしていく中で、子どもたちの動き方がだんだんと大きくなった。A先生がオリジナルの動きを大事にするといったので、子どもたちのオリジナルの動き、自分の表現したいことを表現できるようになった。 創作段階では、子どもたちがはじめにやった動きをもっとダイナミックにするために、子供の思いを大事にしながさらによくするために、という視点で指導した。 「手が長くなった感じ」「大きく見せるために跳んでみたら」 「場を動かせるように、移動距離を長くしたら」 「手先を意識してみたら」 「動きの緩急：すごくゆっくりやってみたら、すごく速くやってみたら」

表4 児童の動きの変化③

A教諭
今回の授業を行う上で子どもたちに「心と体を解放してほしい」と考えていた。しかし、授業者である私もそうだが、表現ということ自体に恥ずかしさがあり、みんなの前で自由に踊ったり、体を動かしたりすることに抵抗を感じる子が多くいるだろうと考えていた。ただ、授業の前に大学院生Cと話をする中で「どの動きも正解」という言葉を聞き、そこから私の表現に対する考えが変わっていった。



図1 同じ題材から自由に多様な動きで表現する児童

## 小学校体育科表現運動における「教育の質」の向上に向けた実践報告

表4のA教諭の回答より、大学院生Cと授業の内容について議論をする中で、「どの動きも正解」という大学院生Cのもつ表現に対する思いを知ることにより、表現に対して児童が抵抗を示すのではないかという懸念や、A教諭の持つ表現に対するイメージに変化が生じたことがわかる。自由になりきって踊る児童の様子を大学院生Cの授業実践を通して確認したことで、A教諭の表現運動「表現」への思いに変化があったことが推察される。

### 3.3 大学院生Cの関わりによるA教諭の表現運動「表現」に対する思いの変化

質問内容「大学院生Cが授業づくりに関わったことにより、どのような変化が生じたか」の回答は、表5から表8の通りである。

#### ①表現運動「表現」に対する思いの変化

得られた回答のうち、表現運動「表現」に対する思いの変化について述べた回答を表5に示す。

表5 表現運動「表現」に対する思いの変化

A教諭
今回の単元を行うまでは、正直「表現は行うのも、授業をするのもかなり苦手だな」と感じており、逃げていた部分があった。しかし、大学院生Cと授業を考えていく中で、「表現」とは「どの動きも正解」という考え方や、「人とちがう動きをいかにできるか」ということを聞いて、この考えを授業に活かしていければ、自分でも授業ができるのではないかと感じるようになった。 実のところ、私はテーマは設定するが、授業中のアドバイスは「いいね」「〇〇（本時テーマ）できてるね」しか言っていなかった気がする。それは「どの動きも正解」という「表現」の教材観があったからであり、子どもたちは、賞賛されるたびに、より動きがよくなっていったように思える。この「どの動きも正解」というのは、他の教科、また他の体育の領域ではありえないことなので、表現運動独特な考え方であると思う。また、それゆえ、子どもたちはやりやすかったのではないかと感じる。 単元を通して「どうすれば上手く表現させることができるか」という考え方から「どの動きも正解だから、どう価値づけていくか」という考え方になったのは、大学院生Cのおかげであると感じる。
大学院生C
私は「表現」の授業では、「いかに人と違った動きを出せるか」を大事にしていた。自分が大事にしていたものがA先生の実践の中に取り入れてくださった。まとめてくださったのを見て、ダンスってこういうものでいいんだ、と思えた。実践を見て私の思いが間違っていなかったことを確信することができた。おこがましいと思いつつも、意見したことが子どもの表現（多様な動き）に生かされていた。正解がないことで多様な動きを認めてあげられることがダンスの魅力だと思う。多様性の価値観を子どもたちに身に付けさせることもよかった。

3.2の考察でも述べたが、大学院生Cの捉える表現運動「表現」への思いがA教諭に共有されたことにより、A教諭が表現運動「表現」の授業実践に対して肯定的なイメージを持つことができたといえる。また、児童に対しても「多様な動き」を引き出すことに指導の重きを置き、「どの動きも正解だから、どう価値づけるか」とい

う他の運動領域とは異なる指導法への気づきが生まれていることがわかる。また、大学院生Cにとっても、自身の持つ表現運動「表現」への思い、つまり「『表現』に関する知識」をA教諭と共有し、A教諭が授業に取り入れ、児童の多様な動きを引き出すことができた。このことは、大学院生Cの知識が「授業」においても生かされることを、大学院生C自身が確信することができたともいえる。

A教諭、大学院生Cのそれぞれの立場で交わされた議論により、双方に表現に対する思いの深まりが生じたとともに、このことが表現運動「表現」の授業の質を高めることに繋がったと推察される。

#### ②授業展開の変化

得られた回答のうち、授業展開の変化について述べた回答を表6に示す。

表6 授業展開の変化

A教諭
授業前に大学院生Cと議論をした際に「子どもたちがいきなり、表現しようとするともずかしいと思う。だから私は小学校時代にマインドマップを使って、その動きから関連するワードを用紙にまとめて可視化していった。」ということを知り、マインドマップを活用して授業を行っていった。マインドマップがあることで、例えば『水泳』だったら、「水のパシャパシャ」「泳ぐ人の勢い」「波」「コースロープ」など、表現の幅が非常に広がったように思う。 最初は、スポーツというと、人の表現しかできていなかった子どもたちが、波や勢い、バドミントンの羽根、疾走感などを表現することができたのは、大学院生Cに教えてもらったマインドマップのおかげである。
大学院生C
本当の動き（ダンスやっているからその動き）を示範で見せてあげられたことで、子どもの動きにダイナミックさを誘発できた。 A先生がどうやったら子どもの動きを引き出せるのかを悩んでいた時に、「マインドマップ」を紹介し、授業で活用された。テーマからイメージを広げていくため、子どもの表現、動きも広がった。

大学院生Cが提案した「マインドマップ」をA教諭が授業で活用したことにより、児童のイメージが広がるとともに、イメージが可視化されグループ内で共有することができた。図2が、実際に児童が「水球」をもとに作成した「マインドマップ」である。「ボールが入らない」や「水の人がもつとなめらかに」など、表現してみたい場面が複数提案され、児童間で共有された。このように、「マインドマップ」の活用によりA教諭が目指したい「多様なイメージの広がり」につながったことが推察される。さらに、「足を動かす」や「大きく」から「バク転側転とか」のように、具体的な動き（表現方法）が提案されていることから、児童の動きの質の高まりがみられた。





## 小学校体育科表現運動における「教育の質」の向上に向けた実践報告

つまり、大学院生Cによる動きの示範は、児童に「“ひねる”とはどういう動きなのか」という動き方のイメージを具体的に理解させることができたといえる。これにより、「自分たちのイメージを表現した動きに、“ねじる”ことで新たにどんな見え方がするのか」「体をねじることで、今の動きがどんなふうに変化するのか」といった、児童の主体的な学びを促したと考えられる。



図3 大学院生Cによる示範



図4 「ひねり」を意識した児童の動きの変化

### ④ その他の変化

得られた回答のうち、その他の変化について述べた回答を表8に示す。

表8 その他の変化

A教諭
やはり、表現運動では子どもたちを「誘う」ことが大切であると感じる。専門的に学んできた人は、それが自然とできるので、私が大変勉強になった。また空いた時間に横国大モダンダンス部の動画を子どもたちが視聴したが、子どもたちにとっては、新たな世界が広がったような感動があった。教職大学院の院生が、子どもたちが経験していない世界に誘ってくれるというのは、子どもたちにとっても院生にとっても非常に素晴らしい経験であると思う。
大学院生C
ダンスの専門家として、観客に伝えるという指導をしたことから、子どもたち同士で「表現し合った内容に対して伝え合う」（学び合い）ことが増えたと思われる。

A教諭の回答から、大学院生Cの表現運動「表現」に関する知識の豊富さが、A教諭の本授業実践に大きく寄与したことがわかる。また、児童にとっても、大学院生Cによる情報提供が学びの深まりに繋がったことが示唆される。

授業の中で児童が互いの創作した動きの流れについて、ICTを使用してグループ内で話し合いが活発に行われていた。大学院生Cが述べた「観客を意識する」ことは学び合いの視点を提供することに繋がり、児童同士の学び合いが誘発されたと示唆される。



図5 ICTを用いた児童の学び合い

### 3.5 専門種目をもつ教職大学院生が授業づくりに関わったことの成果と課題

質問内容「専門種目をもつ教職大学院生が授業づくりに関わったことによる成果と課題」の回答は、表9から表11の通りである。

表9 教職大学院生の関わりによる成果①

A教諭
体育に限って話をすると、領域によっては、授業者でも得意、不得意がある。それゆえ、専門性の高い院生が手本を見せてくれたり、授業者と一緒に授業づくりに参加してくれたりするのは、かなり効果的であると思う。また、今回は、大学院生Cが、毎週クラスに入ってくれたので、クラスの雰囲気や担任の指導方法などを理解してくれているというのも大きかった。おかげで、子どもたちにとっては、より深い表現の学びをすることができ、それ以上に授業者である私自身がたくさん勉強させてもらった。

A教諭の回答より、専門種目をもつ教職大学院生が授業づくりに関わることは、教師の授業構想の段階から授業実践に至るまで、大きな支えになることが確認された。教職の専門性の高い教師が全ての運動種目に関する知識や理解が十分にあるとは言い切れない。教師自身が運動の特性を理解するとともに、その特性に応じた指導方法等を知るためには、その運動種目について専門的な知識を豊富に持つ大学院生からの情報提供は、授業を实践する上での重要な手掛かりになったことがうかがえる。



## 小学校体育科表現運動における「教育の質」の向上に向けた実践報告

また、本研究では「教職大学院生」が授業づくりに関わったことが重要な視点であったといえる。

表 10 教職大学院生の関わりによる成果②

A教諭
大学院生Cが教育現場に週1日だとしてもいたっていいところが大きいです。そのクラスの雰囲気とかにもよるかなとは思いますが、私の考え方を大学院生Cがわかってくれていたかなと思うので、そういった中でこうやって流れを汲んでもらって取り組んできたことは重要であった。今回小学校3年生段階ってことを考えれば、意外にゲストティーチャーが来て1時間動機づけのような授業をしてそのあとを教師が引き取って授業をすることもできると思うが、その次に教師が授業をするようになった時にギャップが生じてしまうことが懸念される。

表 10 の回答からも、教職大学院生が週 1 回、クラスに入って学級経営やその他の授業にも積極的に関わり、教師の意図やクラスの雰囲気を理解していたことが、大学院生と教師、児童との信頼関係を生んだことがわかる。また、教職大学院という、教師としての実践的指導力を高める段階にあり、教師になるための学びを深めている大学院生だからこそ、より質の高い授業を目指した授業改善ができると示唆される。

表 11 教職大学院生の関わりによる課題

A教諭
ぜひ、附属学校のクラスに入って、一緒に授業をつくってほしい。それが院生にとっても担任（授業者）にとっても実りあることだと思う。
大学院生C
今回は週1の実習。常に授業づくりができなかったため、もっと連携の強化が必要だと思った。実践者との相談の上で、もっと子供を引き出すために、示範をするなどで授業に参加する機会を増やすことができたのではないかな。

表 11 の A 教諭の回答からは、今後も積極的な教職大学院生の授業づくりへの参加を期待していた。一方、大学院生 C の回答では、自身の関わり方への課題を挙げている。しかしながら、表 10 の A 教諭の回答を鑑みれば、教育現場において実践を通して学ぶ立場であり、なおかつ運動種目の専門的な知識を有している院生が授業づくりに関わる、ということが重要であるとも考えられる。

### 4. おわりに

本研究では、小学校体育科表現運動「表現」に着目し、専門種目をもつ教職大学院生が授業づくりに関わり、授業実践に関わることで、附属学校教員の「教育の質」の向上に繋がるのかを考察することを目的とした。横浜国立大学教育学部附属 B 小学校における取り組みから、教職大学院生の関わりによって、児童と教員それぞれに「教育の質」の向上が確認された。

- ① 教職大学院生の実施した授業により、児童が表現運動「表現」の運動の面白さに触れることができ、

心身を解放してなりきって自由に表現することができた。また、単元中も教職大学院生の示範により、児童がどのように身体で表現するのかを理解することができた。このことから、児童は種目の特性に触れることができ、児童の主體的な学びを促すことができた。

- ② 教員と教職大学院生との議論、また教職大学院生の授業実践から、教員の表現に対する思いに変化が生じ、それにより指導方法が見直された。具体的には、児童の多様な動きとイメージを引き出すための言葉かけや示範、手立て（マインドマップ等）が提案された。このことから、運動種目の特性に応じた指導方法の確立を促すことにつながった。

教職大学院生が授業づくりに関わることにより、教職大学院生が身体を通して運動の特性、本研究では表現運動「表現」の特性を児童と教員に伝えることができた。運動の面白さ・魅力に触れられた児童におこる「楽しい」「おもしろい」の感情は、児童の「もっとやりたい」「どうやったらより〇〇に表現できるのか」という主体的な学びにつながるといえる。つまり、教職大学院生の介入により、児童の学ぶ内容、学び方の質が向上したことが示唆される。

また、専門種目をもつ教職大学院生は、運動種目を行ってきた経験から「教材内容についての知識」に長けている。その知識を「教授方法についての知識」「生徒についての知識」を豊富にもつ附属学校教員に提供することにより、「教育の質」の向上に寄与すると考えられる。

さらに教職大学院生という、「教職に就くこと」を目的に大学や学校現場で学ぶ立場の者が授業づくりに関わることも着目できる。本研究の対象者は教職専門実習の一環として、週に一日、クラスに入り学級経営や授業参観、模擬授業を実施している。ここから生まれる教員や児童と教職大学院生の間の信頼関係が、授業づくりに関わる際に重要な点になりうるといえる。

以上の通り、本実践研究の成果は教職大学院生の関わりにより、附属学校の「教育の質」の向上が確認されたことにある。附属学校が大学・教職大学院に学ぶ場や情報を提供するばかりではなく、教職大学院生との関わりによって互恵関係が生まれること、それにより附属学校の「教育の質」の向上を期待できるのであれば、今後も双方の連携を深めていくことが望まれる。

## 注

注1) 岩田ほか(2018)は、教師教育者を、大学教員や附属校教員、指導主事、各学校の研修主任、民間教育団体のリーダー等といった教師を育てる教育者と示している。

注2) 教職専門実習とは、理論と実践の架橋・往還・融合の意味と意義を実感し、いわば理論知を実践知に変換する資質能力を獲得するカリキュラムである。横浜国立大学教職大学院において学部卒業学生は年間150時間を基準とし、学校における教育活動や事務全般について総合的に体験、授業や学級経営に関する基本的なスキル等を身に付けることを目標としている。また、各自の課題解決研究の課題を発見するとともに、課題解決研究で検討した理論に基づいて授業実践を行っている。

注3) 新聞紙を用いた教材は、新聞紙の可塑性に着目し、多様な質感を捉えて踊る教材である(山崎, 2014)。また、表現運動「表現」の知識及び技能は、「身近な生活などの題材から主な特徴を捉え、表したい感じをひと流れの動きで即興的に踊ること。」(文部科学省, 2014)である。

## 引用参考文献

栗谷好子・阿部哲久・辻本成貴・金鍾成・川口広美(2022) 大学講義と教育実習をつなぐ新たな協力体制の研究—教師教育者が考える成果と課題とそれに基づく協力体制の改善策の検討—, 広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要第49号: 25-32.

中央教育審議会(2006) 今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)

藤田育郎・岩田靖(2019) 「保健体育科教育実習の充実に向けた取り組みの成果と課題—学部と附属学校の連携・協同の在り方—, 教育実践研究 18: 149-158.

岩田昌太郎・草原和博・川口広美(2018) 教師教育者の成長過程に関する質的研究—TAの経験はアイデンティティ形成にどのように影響を与えるか—, 日本教科教育学会誌第41巻第1号: 35-46.

広島大学大学院

木山慶子(2016) 教員養成における模擬授業の学習成果の検討—学生による授業分析を用いた省察から—, 群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編:

83-93.

宮崎明世(2010) 「筑波大学と附属学校との連携による、保健体育科教育実習のあり方の検討—大学における事前指導および指導計画の作成法—, 筑波大学体育科学系紀要 33: 99-105.

文部科学省(2018) 小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説体育編, 東洋館出版社.

清水将・紀修・森本晋也(2018) 教職大学院における科目「リフレクション」に関する検討—ストレート・マスターに対する教師教育の充実の観点から—, 岩手大学大学院教育学研究科研究年報 2: 105-116

山崎朱音(2014) 創作ダンスの指導における指導言語の意味と動きをみる観点: 教材「新聞紙を使った表現」を対象に, 体育学研究 59(1): 203-226

山崎朱音・野津一浩・新保淳(2018) 教職大学院化に向けた教員養成課程と修士課程の連携を意図したカリキュラム構成の検討: 大学院生の授業参観及び授業実践による省察内容の変容を事例として, 静岡大学教育実践総合センター起用 vol.27: 46-57.

山崎保寿(2018) 教員養成の高度化の動向を踏まえた教職大学院と教育センターとの連携型研修モデルの開発—教員養成の高度化に関するシンポジウムの成果の検証—, 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会・自然科学篇) 第68号: 143-154.

米村耕平(2008) 香川大学教育学部附属小学校との連携による教員養成プログラムの開発(その3), 香川大学教育実践総合研究, 17: 51-61.

吉崎(1987) 授業研究と教師教育(1)—教師の知識研究を媒介として—, 教育方法学研究 13: 11-17.